

オタクな  
巫女さんは  
イヤですか？

小説 089 夕ロー  
挿絵 吉飛雄馬

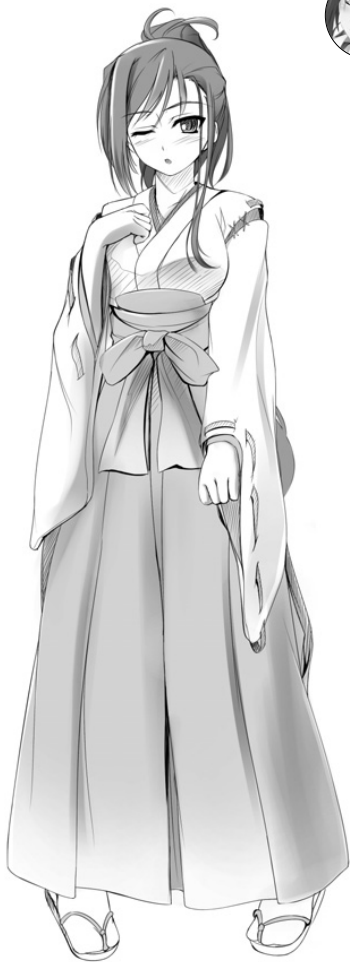


二次元ドリーム文庫 / PDF立ち読み版



## 登場人物紹介

Characters



はるさき あかね  
**春咲 茜**

拓郎のクラスメイト。気が強く真面目で、面倒見が良く子供好き。



はるさき さくら

## 春咲 桜

茜の妹。ぼへっとした表情の、  
感情が理解しにくい女の子。



みねぎし たくろう

## 峰岸 拓郎

自他共に認めるオタク少年。  
カメラを常時携帯している。



はるさき みどり

## 春咲 碧

茜の姉。明るく朗らかで  
ちょっぴりエッチな雰  
囲気を持つ。

序章	巫女さん好きはおイヤですか？	007
第一章	コスプレお姉さんはおイヤですか？	029
第二章	同人少女はおイヤですか？	065
第三章	ヒーロー少女はおイヤですか？	108
第四章	神様の前ではおイヤですか？	152
第五章	巫女さん姉妹はおイヤですか？	200
終章	あまゝい三姉妹はおイヤですか？	245



(こ、これはっ！ ほ、ほんとに……ヨコ乳が出てるよ……！)

胸布はブラのようには、しっかりと包んでいない。強いて言うなら前後への揺れを抑えているくらいで、左右には紐すらついていなかった。おかげで脇からも乳肉が零れており、それこそ両脇からソレを揉み揺らしたくなってくる。

知らず、息が上がってくる。喉が鳴り、心音が聞こえてくる。

ウフフッ……と、不思議な……艶めく微笑。今度は優雅に肩を前後させながら、ゆつくりと歩み寄ってくるコスプレレイヤー。腰に手をやり、まるでモデルのように格好よく、しかし——色っぽく——膝立ちのカメラ小僧に近づいてくる。

レンズ越しの女体が、舐めるように上下する。腰から胸元へと、何度も、何度も。

際どい食いこみが間近に見られ、煌めく光沢が美しい曲線を描き出す。一見水平に見えながら、実はなだらかに谷間を作る腿の隙間の甘い肉感を。

上に登れば、黒っぽい網目に包まれた乙女の下腹。微かな白肌を透かせながら、ふつくらとした優しさを感じさせる部位だ。どこか——その内側を味わってみたいくなりそうな、沸々と本能をくすぐられる下腹部と縦へソ。

さらに登れば、今度は圧倒されるような大きな肉塊にぶち当たる。左右に膨らんだ驚異的な標高の肉の丘。だが、決して険しさなど感じさせず、むしろ登山者を優しく迎えてくれそうな、滑らかな表面と心地よさそうな柔肉感。艶めくエナメル先端、その頂点に、いつまでも抱かれていたくなる、タップン、タップン……という誘惑。

はあ……はあ……はあ、はあっつ、ゴクッ!!

喉がカラカラになってくる。指が凍って動かない。シャッター音も聞こえない。

ただ——被写体が——レンズが、豊かな胸と腰を行ったり来たりするだけ。

色つぼく覆われた柔らかさそうな巨乳。キュッとくびれた腰のライン。むっちりとした太腿。緩やかに膨らんだ見えそうな乙女の秘股。

股間にムズムズともどかしさを感じながらレンズを上下させる拓郎。だが、もう何を撮っているのかも分からない。何を撮りたいのかも、何を見たいのかも……。

「フフッ……立っちゃったんだ？」

えっ？ と碧を直に見上げる拓郎。気づけばカメラは彼女の顔などではなく、胸や腰ばかりを写していた。だから碧の表情——赤面しつつも色っぽい——に気づかなかつたのだ。「オタクのコって、本物の女のコには興味ないコも多いけど、キミは違うのね？」

今度は拓郎が赤面する番だった。いや、すでに赤かったかもしれない。ギクリとしてズボンの股間を見下ろすと、そこはパンパンにテントを張っていた。

「ごっ……ごめんさい！」

慌てて股を閉じて謝罪。興奮するのは仕方ないと言えば仕方ないが、好意で許された撮影には不純だとも思えた。ましてや茜の姉に欲情してしまうなど。

「クッス。謝らなくてもいいのに。意外と真面目で可愛いんだね？」

微笑を浮かべる巫女姉妹の長女、碧。その笑顔は、どこか不埒ふらちで意味ありげだ。

「ね、アタシにも見せて……」

「あっ!? み、碧さん……!」

スウ……と、美麗な顔が眼前に迫った。空想の剣士は少年の前で膝をついて、身を乗り出してくる。ぷるん、と乳房が優しく波打ち、両手がスス……と腿を割っていく。

「や、やめてください碧さん……こ、ここは……!」

「あら〜? 散々アタシのは見たくせに、自分の恥ずかしいトコは嫌なんだ?」

悪戯いたづらっぽく笑う美人姉。少年の弱い拒絶など意にも介さず、優しくも力強く開く。

「フフ、こんなにしちやつて〜。見て、オツユが沁みてきてる」

突っ張ったテントの頂点を覗きこみながら、美顔が歪む。嘘みたいただが、それは決して不快な表情ではなく、むしろ楽しそうに見えた。

「ね? このコスでスルと、オタクつても〜と萌えるのかな?」

にんまりと訊ねられ、拓郎は喘あえぐように言葉を詰まらせた。スル、とはどういうことなのか。理性では理解していても、感情が事態についていけない。

「で、でもっば、僕……こ、こういうこと……!」

するつもりで来たのではない。だが碧は、別の解釈をしたようだった。

「フフッ。だあいじよおぶ。茜には内緒にしたげるから、アタシがシテアゲルっ」

「そ、そんな……そんなこと……!」

躊躇ちゆうちゆうするオタク少年を、コスプレ美女はそっとベッドに座らせる。白いシートがキュッ



と皺になり、男の股が再び開かれていく。

「こんなに腫れちゃって大変。でもアタシは剣士だから、回復はできないの。だ、か、ら、マッサージしかないわね？」

なりきりプレイのつもりだろうか。確かにゲームの設定では、彼女のキャラは回復術は使えない。そして美人姉は、焦らすようにベルトを緩めて、ズボンとパンツを下ろしていく。そして――、

ピンッ!! ピチン!

「アハッ、出てきた。おっきい」

パンツのゴム紐に下げられたペニスは、一旦下を向いてから勢いよく跳ねあがった。そのまま下腹に当たって跳ね返り、透明な雫を弾き散らす。

「あ、あああ……み、碧さん……」

信じられない思いで股間を覗く美人を見つめる拓郎。妄想などでは、これらしいシチュエーションも出てきたことはある。だが妄想と現実の区別はしていたつもりだったのだ。

そしてそれが今、妄想から現実へと変わりつつある。

押さえつけられたように身体が動かず、ただ小刻みに震えるばかり。心音はドキドキとうるさくて仕方ないのに、耳は女性の吐息だけを捉えている。初めて女性に恥部を見られたというのに、羞恥心を興奮が押し潰していく。

「こんなにピクンピクンさせちゃって。待っててね、今、挟んであげる……」

そう言っって怪しく微笑むと、コスプレ美人は、丸見えの胸の谷間をニュウツ、とペニスに押し当ててきた。

「うあつ……あ、あああつっ」

「あん……硬あい……長あい……これが、拓郎クンのオチンチン……素敵っ」

途方もない柔らかさが、根元からたつぷりと包みこんでくれる。その温かさと肌触りは、男の手などは比較にならない心地よさ。しつとりときめ細かく、しかしねつとりと挟みこんでくれる、想像外の柔採み悦感覚。

まるでフワフワの水枕のようだった。あくまで柔らかいのに優しく人肉を抱きとめてくれる。そしてムニユムニユと流動し、暴れる雄をゆつたりとなだめてくれるのだ。

気持ちよい乳抱擁にビクビクと腰を震わす拓郎。彼のペニスは太さは並程度だが、長さは並以上のサイズだった。そのくせ亀頭は大きめで、張り出た傘も面積が大きい。まさに長く育ったキノコを思わせる形状だ。

まだ薄い色合いの新鮮な雄キノコ。それが深い谷間に柔甘く沈められていく。たつぷりと膨らむ乳房は見事に幹を包みこむが、大きめの亀頭だけは喉元に突き出していた。

「すごい……こんなオチンチン、見たことないわあ……」

うっとりとした目で喉元の亀頭を見下ろすと、碧は滑らかに乳房を動かし始めた。  
むにゅっ……にゅるっ……ぬるるん、キュッ……。

「お、あああ……す、すご……い！」

柔らかい乳摩擦に感動の唸りをあげる拓郎。アダルトアニメなどでは知っていたが、本当にパイズリなどが気持ちいいかは疑問だった。所詮自分でするのと大差ないのでと。

だが実際の体験の前には、そんな想像など拙いもの<sup>つたな</sup>と知らされる。つきたての餅のように形を変える乳肉は堪らなく快感で、優しく幹を包みこんで擦ってくれる。そこには自慰のような乱暴さは微塵もなく、あくまで平等に、緩やかに全体を刺激してくれる。おかげで一気に昇りつめることもなく、ゆっくりと浸るように気持ちよくなっていく。

(ほ、ほんとに……気持ちいい。こ、これが、女の人の柔らかさ、なのか……！)

驚くべき性感の波に意識を溶かされていく少年。じんわりとじんわりと、幹の痺れが強められていく。それが長続きするため、脳がぼんやりしてくると同時に、早く昇りつめたいという欲求が沸々と湧きあがってくる。

「ん、ん、ん……ね、拓郎くん？ キミもしごいてみて。んっ、アタシのおっぱいで……」

「はあ、はあ、はあ……い、いいんです、か……？」

頬を紅潮させて頷く巨乳美女。すでに桃色に染まりつつあるオタク少年は、躊躇いもそこそこに、大きな乳房に手を伸ばした。

スス、きゆうっ……むにむに……！

「あん！ そう……アタシも気持ちいいよお……」

少年の掌がゴム鞠のような乳房を揉んだ途端、美女は眉根を寄せて微かに震えた。さらにそのままむっちゅりと揉みこんでいくと、先ほどの笑みが少しずつ剥がれていく。目尻

がトロンと下がってきて、眉根は時折ピクピクと揺れ動く。

(み、碧さん……いい、色っぽい！)

快感に一足遅れて、興奮が追いついてくる。摩擦の快感は極端に強まったわけではないが、柔らかい胸の感触は神経ではなく本能を刺激してくる。また、これによって女性が気持ちよくなってくれているという思いが、堪らなく心を熱くした。

「はあ、はあ、はあ、み、碧さん……む、胸……見ても、いいですか……？」  
「ん、はあ……ああい、いいよお……生のおっぱい、見てえ……！」

はあはあと息を荒げながら、そつと上下に支えられたブラ生地に掌を差しこむ。直に乳肌に触れると、サラツヤの感触に心地よい鳥肌が立ってしまう。さらに掠めるように指を忍びこませると、微かにコリッ、とした粒状の感触。それに一瞬ドキリとしてから、ゆつくりとブラ部分を脇側にずらしていく。

むにゆるるうり……と緩風船のように形を変え、左右に開いていく魅惑のコスプレ爆乳。そして生地はツツウ、と男指甲を滑っていき、やがて掌が開き除けられると――、  
っっぱわっ、ぷるぷるるん……！

(おっ、おっおっおっおっ！！ こっっっ、これが……お、お、おっぱ……い……！！)  
柔らかく波打ちながら、メロンのような豊潤な生乳房がまろび出る。エナメル生地から解かれた乳房は、あまりにも淫らに、扇情的に、少年の視界で舞い揺れた。

分かつてはいたが、直に見る裸乳は、脳裏を白熱させるほどに劣情をかきたてた。圧倒

的な膨らみは、見ても触れても揉んでも吸っても挟んでも、何をするにしても男股間を直撃する最強の対雄用の柔極乳だった。男性感を完全暴発させるほどの魅了乳器。

それはまさに、乙女だけが持った、男を狂わす凶器。永遠に雄を魅了する二つの至宝。

「あん。おっぱい、見えちゃったね……」

「あああ……すごい……お、大きくて……白くて……これが、乳首、で……！」

まるでミルクを溶かしこんだように滑らかな白さだった。汗と先走り汁で濡れた肌はツヤツヤで、揉みこむとツルツルタプタプと形を変える。先端の乳首は濃い目の肌色で、小さな乳輪の中央にはぶつくりとした乳首があった。

「はあ、はああ……！ すごい、すごいよ碧さん！ 僕、僕……堪らない！」

いよいよ興奮が脳を支配し始め、巨乳でしごくだけでなく、自らも腰をスライドさせて乳肉をこする。勢が増したため、ペニスにかかる快感も急速に強まっていく。

「あん！ あん！ あん……い、いいよお拓郎クウン……もっと、ズゴズコしてえ……」

碧の表情がさらに悩ましくなり、口元が緩んでいく。垂れ落ちる涎がいかにも快感の度合いを示しているようで、拓郎の波も急上昇だ。

むちゅっ！ むちゅっ！ むむにゅっ、むちゅっ……！

「はあ、はあ、はあ！ ジンジンして、僕、ジンジンして……！」

ペニス全体がピクピクと震え出す。激しいスライドは亀頭を乳肉に埋め、突き出しては碧の美顔近くにまで迫らせる。

誘われたはずだが、今は犯しているような錯覚が起こる。それが雄の本能と神経を高ぶらせ、ペニスの感覚を麻痺させていく。そして奥で閉まった精栓をも緩め、確実に恍惚の液体を駆け上がらせていく。

「あああ、碧さん！ 僕、ぼくっ……！」

「あん！ あん！ こ、こんなにピクピク……イクのね？ いいわ、イってええ……！」

少年の限界を受けて、美女もスパートをかけてきた。両脇をギュッと締めて巨乳肉を寄せて、グイグイと身体を使ってしごきたててくる。亀頭の動きがスライドから、谷間の奥に突き立てるような形になった。

そして、そこが拓郎の限界だった。

「あああっ！ だめだ、イクっっ！」

びゅるっ！ びゅぶるるるるるっっっ！！

「あん、あああああああ……！」

碧の顔が恍惚に歪む。開いた口に白い精液が飛びこみ、赤い唇と濡れた口内を汚している。的を外した白濁は、白い顎や喉、そして乳房をべったりと濡らしていく。

「はあ、はあ、はあ……ご……ごめん、さい。汚しちゃって……」

「ん、フフッ、いいのよ。拓郎クンのオチンチン、いっぱい感じられたから……」

悩ましい表情を緩めて微笑む巨乳美女。その顔を見ていると、とても安らぐと共に、さらに何かを許してもらいたくなる欲求に駆られてしまう。



「は、ああ……んふ、んんあ……ゆ、ゆび……ああ」

「はあ、はあ……ご、ごめん。でも、すぐ、触り心地よくって、つい……」

「はあ……あああ、う、うれし、い。も、もつと……いい、よ……?」

褒められて、少しだけ安堵するような茜。優しくも情熱的な愛撫で、確実に性感が高められていく。

拓郎もまた、さらなる行為を促されて、心音をバクバクと強めてしまう。この次は何をすればいいのかと悩んだ末に、両手でそつと、胸元の襟を開いていく。

巫女服の下に下着があることは、桜のときに知った。そして今回現れたのは、薄いブルの衣服に近い印象の下着。つまり、スポーツブラだった。

(シンプルな下着なんだな……でも、爽やかで、真面目な茜さんには似合ってる……)

むしろ異性に媚びないところが、特別な関係を際立たせる気がする。この下着を見られる者は、彼女に選ばれた幸運な男なのだ。

スス……とブラの肩紐に指を忍ばせる幸運少年。上に脱がせるのは無粋な気がするの、下げることにする。

ゆっくりと、滑らかな肩を滑り、脇の隣でふくよかな膨らみに引っかかり、それでも徐々に下ろしていくと、胸肉がキュウ、と押し下げられて……。

ぶるるるんっ！ ふるる、ふるる……！

「おおおおお、茜さんの……おっぱい……!」



少年の口から感嘆の声が漏れた。生で見る美少女の双乳は、見事な存在感と美しさを誇っていた。きめ細かい乳肌は白く、柔らかそうだが若々しい張りもある。みっちりとした感じが詰まった感じだ。そして綺麗な丸みの頂点には、とても控えめな薄桃乳首。

「んう……は、恥ずかしい……っ。ムネ、見られて……っ」

唇を噛んで視線を逸らす巫女少女。細い肩を儂げに竦めて、顕な半身をたつぷりと見つめられてしまう。そして少年の掌に直に触れられると、ビクッと震えてしまう。

「あっ……！！ た、拓郎……君っっ」

ススうう、ス……むにっ、むにっ、もみっ……きゅっ。

「あああ、茜さん……やっ、柔らかくって……気持ちいいよ……」

「やあ……っ。た、拓郎君の手……や、優しい……っっ！」

異性の掌が、ゆつくりと乳肉を揉み撫でていく。決して強くない、緊張を解きほぐすような優しい手つきに、乙女の肌は、早くも甘溶かされていく。

白い乳肌はとても瑞々しく、弾力がありながらも、雄の指を拒まない。皺一つないのに内側はしっかりと熟した、乳白色の甘果実。その心地よい手触りに、少年の胸も熱く焦がされていく。

「ゴクッ……あああ、ち、乳首……た、立ってきてる、ね……？」

「んう……やあっ……！！ はあ、はあ……いっ、言わないでえっっ」

まるやかな先端では、小さな小さな恥突がプク……と自己主張していた。雄の暖かさに

刺激されて、乙女乳房がどんどん少年に添えていく。

心なしか、膨らみ具合まで大きくなっていく気がする。揉みこむと柔らかく形を変えるのに、内側からはふつくと丸みを強めていくような、不思議な触れ心地。

「凄いつ、どんどん柔らかくなって……大きくなって。なのに、ふるふるな肌で……最高だよ、茜さん……！」

脳髓を溶かすような感動に、少年の鼻息は荒くなる一方。今まで感じたことがないほどの、圧倒的な熱気が胸を埋め尽くしていく。

(し、幸せな気分になってきた。嬉しくて、馬鹿になりそうで……)

ほかの姉妹とのセックスとは、どこかが違う。性熱だけでなく、心まで満たされていく感覚が、興奮とは別に、優しい気持ちをかきたててくる。

「あ、茜さん。僕、茜さんの……全部が、見たい……」

顔を真っ赤にしながら、鼻先で吐息する少年。その求めるような視線に釘付けにされて、少女の唇からも、熱い吐息が零れ出る。

「……ん……いい、よ。君になら……」

モジモジと擦りあわされる太腿に、途方もない愛らしさを感じてしまう求愛少年。言葉どおり袴の下は、男の侵入を許してくれているように見えた。

「じゃ、じゃあ……横になって……」

そう囁いて、そっと両肩をベッドに押し倒していく。ゆっくりと倒れていく姿が、また

何とも愛おしい。自分にすべてを預けてくれているようで、男冥利みよりのに尽きてしまう。

ふわっ、とベッドに沈む想い少女。襟をはだけて胸元を曝け出している彼女は、儂なまさすら感じさせて、少年の手つきを一層優しいものにしていく。

スス……と、腰の緋袴に異性の掌がかかる。サラサラの生地を丁寧にたくし上げられ、茜の興奮はさらに高められていく。純潔の本能に眉間が悩ましく寄せられる。

スカートのように上げられて、その下の少女下着が明かされる。ブラとお揃いのブルーのショーツを、優しい少年にじっくりと覗かれてしまう。恥ずかしげに揺れる腰。

「そんなに、見ないで。恥ずかしいよ……っっ！」

「ごめん。でも、茜さん……可愛い……」

すでに何度かの経験を得た少年には、乙女の変化をつぶさに見て取れた。シンプルなデザインデザインの薄生地、その股の部分は、うっすらと肌肌に吸いついていたのだ。

「ここ……あつたかい。濡れてるんだ……？」

「あっ!? ああ……触っちゃ……いやあ……っっ」

少年の温掌が、包みこむように乙女股に触れたのだ。その優しいタッチに、堪らず顔を覆覆つてしまう茜。

だが、いくらか羞恥に慣れたせいか、太腿を閉じるまでには至らなかつた。その結果、純潔を隠す最後の一枚をも、脱がされることを許してしまう。

すううう……と、薄青下着が下ろされていく。途方もない羞恥と興奮が、少年少女を熱

く昂らせていく。

「つつああああ……こつ、これが……茜さんの……」

ついに拜見できた美少女の秘所に、感嘆のため息を漏らす拓郎。そこは、碧ほどの淫猥さはないが、桜ほどの幼さもない、適度な開花と潤いを持った花卉であった。

縦に走る肉裂は、僅かに開いた薄紅色の濡れ唇。上端には隠れるような小粒があり、息づくたびに愛らしく震えている。尻の隙間から見え隠れする穴は、多分姉妹の誰より小さい。また、肉丘に茂る黒い肌毛は、とても少なく初々しい。

評するならば、慎ましやかに蜜蜂を待つ、清楚で可憐な雌蕊めしべというべきか。

(な……なんて、綺麗なアソコなんだ……まっ、まさに……巫女の鑑だ！)

静かに殿方を迎えてくれそうな、美しい恥じらいを持つ秘口。その感触を確かめたくて、少年の指がそおつと触れられる。

「ああつつ!? そんな、指……そんな、トコお……つつ！」

くちゅ……と指先が、柔らかい媚唇に埋められる。途端に柔肉が身悶えし、乙女腰はビクン！ と跳ねあげられる。

一瞬、びっくりして動きを止めてしまう拓郎。だが、両手で顔を覆い、ふるふると悶えている茜を見ると、どうにも興奮が抑えられなくなってしまふ。

「ご、ごめん。でも、茜さんのココ……すごく綺麗で……」

「はああ……でもでも、そんな……んふう……！ 動かさないでえ……つつ！」

異性の指に秘裂を撫でられて、少女の腰は艶かしく狂わされていく。内側の媚肉をクチュクチュと軽擦られて、ゆっくりと振られるくびれた細腰。恥ずかしそうな乙女の美顔が、困惑するように悩ましく揺すられる。

一方で、少年の興奮は確実に昂っていく。湿った恥裂に指を添わずと、円を描くように撫でていく。ゆっくりと優しく、腫れ物に触るような心地で。

ちゅぷり……くちゅ、くちゅる……ぴちゅつつ。

「んん……！ はああ……ううう……はああ、はああ……は、はずかしいつつ」

「……でも、気持ちいいんだ？ 雫、垂れてるよ……」

指愛撫には、決して強い動きはない。だが、温かい指腹は丁寧な股唇を舐め回し、乙女の内をじつとりと熱していく。そして汗ばむように、滑らかな蜜を零していくのだ。

「はあ……はあ……んはあ、ふうん、たく……ううんつつ」

M字に開かれた巫女股が、悶えるように振られ始める。恥ずかしいのに、拒むのも寂しい、そんな淡い葛藤が見え隠れする、実に愛らしい快感少女。

（これが……いいんだ……茜さんのココ、どんどん濡れてくる！）

触れば触るほどに、そこは柔らかく蕩けていく。優しくプッシュするだけで、爪先が埋まってしまうくらいに。濡れ具合もあって、唇に包まれているようだ。幾重もの薄い舌を持つ、色の薄い激甘唇に。

「はあ……はあ、はあ、ふはあ……い、いやああ……拓郎君、拓郎くつつ」

夢中で弄ってくる少年のせいで、茜の柔腰が次第に喜びを顕にしてしまう。優しく媚唇を撫でられて、えもいわれぬ甘刺激に腿はピクピクと揺らされる。昂る胸のようにヒクつく下腹部、その奥から恥蜜がトプツ……と漏れてしまう。それを指ですくい上げられるたびに、茜の肢体が艶かしく狂わされていく。

「たっ、拓郎く……ん。もおっ、これいじようはあ……っっ！」

恥じらいと快感で悩ましい声をあげる美少女に、ようやくその時が来たことを実感する拓郎。彼とて十分に焦らされた気分だった。股間はすでに、結末を求めてやまない。

「あっ、茜さん。僕っ、そ、そろそろ……いいかな？」

愛撫を続けながら、そっと顔を寄せて訊ねてみる。今更拒まれるとは思っていないが、やはり確認はしなかったのだ。乱暴だけはしたくない。

「あはああ、はああ……っつ、いい、よお……キテ……」

コクン、と頷く美顔に許されて、少年の身体がゆつくりと少女に覆いかぶさっていく。

指が股間のジッパを下ろし、中から興奮を曝け出す。自身の袴で見えづらいたろうが、初めて見る異性の裸棒に、茜は戸惑いを隠せない。

「あああ、こ、これが……拓郎君の……お、お……おち……」

その先を口にできない彼女に、こみ上げる愛しさを抑えられない拓郎。ちゅっ、と唇に吸いつくと、安心させるように肩を抱く。

「大丈夫、僕に、任せて……ちゅっ」

「んちゅっ、ちゆる……ああ……うん。お願い……ちゅん……」

どうすればいいのか惑う巫女に、意を決した少年の股間が迫る。その際、まだ脅えを見せる美顔に、キスの雨を降らせながら。

(たっ、確か……このあたりのはずだ。この、一番柔らかいところ……)

ここ数日の経験が、ここに来て物を言っていた。意外と下のほうの乙女乳を探りあて、分身の縦唇でちゅん、とキスをする。すると茜はアン、と一つ可愛く震えた。おかげですます欲求が高められ、熱勃起がゆっくりと侵入を果たしていく。

ツプウ……ちゅプちゅプニユる……

「ちゅむ、んんっつ!! ぷふっ、はああああ……つつ!!」

張りのある肉傘が、ねっとり濡れ肉に埋められていく。女性の中で、もつとも熱く、柔らかい唇。その合わせ目が、漲る情熱で淫靡に押し広げられてしまう。

(は、入っていく……よ、よし。ここでいいんだ!)

密かに失敗を恐れていた拓郎だったが、どうにか探りあてた秘所に向かって、さらに肉勃起を押し進めていく。プリプリとした入り口を滑り、温かいシャワーを浴びながら。

ずちゅ……ちゅむむむくちゅくちゅうう……!!

「あ、あくううう……!! んう、はあああああつ、くう……つつ!!」

狭隆をムチュリと押し広げられる処女巫女。胎内を異性に満たされていく乙女の喜びに、薄紅色の充血媚肉がヒクン、と慄きながらも、雄の剛直を受け入れていく。

甘く柔らかい肉の包みに、少しずつ抱かれていく興奮棒。張りのある先端が、濡れた隙間を優しく、力強く、かき分けるように奥へと進んでいき、そして……。

「んっ、ん、んんうう……っっ！」

——むちゆり……っっ、プチり……っっ!!

「あうううっくううう!? うううあああっつっつんん!!」

ついに——汚けがれなき巫女の操みさおが、オタクな少年に捧げられた。破膜の感覚に少女は慄き、少年の胸は熱く焦がれていく。

「はああああ……は、入った、よ? 茜さんと僕ひ、一つに……!」

(くうう……!? きっ、気持ちいい! 凄い締まってるのに……でも、優しい……!)

軽い弾きと優しい抱擁力に彩られた、何とも心地よい処女蜜壺。その温かい腕に搦め捕られて、オタクペニスはますます漲ってしまふ。

「んんう、ああん……わ、分かる……んん、た、拓郎君の……熱い……!」

眉根を寄せて、ふるふると頬を揺らす破瓜美少女。零れそうな涙を堪えながら、必死に痛みを我慢している。

透明な露には、ジワ……と少ない朱色が滲んだ。それを確認することはできなかったが、彼女が辛さを堪えているのは、拓郎にもはつきりと分かった。

(やっぱり茜さん、初めてだったんだ……)

態度を見れば、想像は簡単だった。しかし、こうして実際に繋がってみると、美しいク





ラスメイトのバージンをもらったという実感に、改めて胸が熱くなる。

(でも、痛そうだ、茜さん……このまま僕だけ気持ちよくなるのは悪いよ……)

「や、やっぱり、痛かった？ ごめん、僕が上手くやらなきゃいけないのに……」

彼女に痛みなど味わわせたくない少年は、つい、腰を引き抜こうとしてしまう。だが、そんな彼の不安げな頬を、茜の両掌が、ふわっと挟みこんだ。

「だ、だいじょうぶ……拓郎君の、優しいよ……?」

そしてそのまま顔を寄せて、ちゅっ、と唇を吸ってくれた。

「はああ……でも……やっぱり、拓郎君……姉さんたちと……」

あ、と驚いてしまう拓郎。リードしなければならぬ、という思いはあったが、逆にそれが、自身を童貞ではないと証明してしまった。おかげで茜の唇が、ツン、と尖ってしまう。しかし――。

(や、妬いてくれてるんだ……な、何か……嬉しい！)

やはり彼女は、ほかの姉妹とは違う気がする。碧も桜も、どこかでセックスを楽しんでいる節が見えたが、茜の場合は、純粹に愛情行為と考えてくれるようだった。

そんな巫女がとても愛らしく思えて、少年の反り勃起は、ゆっくりとグラインドを始めてしまう。

「あっ、ああ……つつ。た、たく……!」

「……ごめん。でも……僕、君のこと、好きなんだ……本気なんだ!!」

唐突に愛を訴えられ、少女が当惑の表情を浮かべる。涙で潤んだ瞳がまた大変に可愛らしくて、挿入腰にも一層愛しさが乗る。

「あつ、あつ、あふ……こんな……ふ、深い、の……」

緩やかで丁寧なスライドが、確実に深部を探りあてていく。胎内に直に伝えられる人肌熱の感覚に、処女巫女は戸惑うような顔色を浮かべる。

片や少年勃起は、早くも乙女腔に酔いしれてきた。しつとりと潤ったヒダヒダは細かく、幹を丹念に撫であげてくれる。そして敏感な亀頭には、小さなツブツブが吸いついてきて、心地よく膨らまされてしまう。

（くうう！ 気持ちいい……初めてだったら、もう、出してたかも……）

パンパンになった先端を自覚して、何となく、拓郎は姉妹に感謝した。童貞だったなら、きつと自分だけが満足して終わっていただろう。それはあまりに彼女に失礼な気がする。

「ああ、茜さん、僕、もう堪えないよ……ち、ちゃんと、動いていい？」

「い、いい、よ……わたしでいいなら……い、いっばい、動いてっっ」

初めての少女には、どのようにすればいいのかわからない。だが、自分が彼を満足させられないのは嫌なのだろう。ひたすら味わってもらうことを願い出てしまう。

そんな茜のいじらしさと儂さに、拓郎の情熱はメラメラと燃えあがっていく。

（可愛い……感じたい……茜さんの中、僕だけが知ってるんだ！）

穏やかな抽送に、艶やかなヒップが緩やかな波紋を刻む。優しい曲線の安産尻は、そこ

だけでも男を包みこめそうだ。揺れる美巨乳も爽やかな桃色で、決して淫靡には映らない。なのひたすら愛情が高められ、それが下半身を焦がしていくのだ。

「茜さん、ちゅっ……キツキツの中、凄い気持ちいいよ……ちゅっちゅっ」

「んっ……ちゅ、っはあ……そんな、恥ずかしい……っっ」

上から覆いかぶさりながら、何度も繰り返すキス。自分の胸板の下で跳ねる乳房を感じながら、少しずつ腰の振り幅を広げていく。

じゅぶ、じゅぶ、じゅぶ、サラ、サラ、サララ……。

「ちゅぶっ、んん、ぢゅ……はあ、は、袴、濡れちゃう……」

「ごめん、でも、巫女さんの君……ほんとに……綺麗なんだ。ちゅむっ」

少年に肩を抱かれて秘所を捧げ続ける巫女少女。愛情たっぷりのセックスに、心と共に、身体の奥までがしつとりと満たされていく。

「た、拓郎……あ、熱い。ちゅっ、硬い……ああ……」

キスにも慣れ始め、浸るように没頭していくオタク少年。微かに悶えてくる美少女を抱きながら、甘い締めつけを堪能していく。

「あ、茜さん……中、キュッ、てしてる。すご、気持ちいい……！」

愛情ピストンが、徐々に——しかし確実に、勢いを増していく。包みこんでくる肉壁は、優しいながらも、ムッチュリと隙間なく抱きしめてくる。それは引き抜かれても変わることなく、ペニスまでがキスされているような心地だった。

(凄いい、凄いいよ！ キツイ締めつけなのに、とつても柔らかくて……う、裏筋が、舐められてみたいで……!!)

気がつけば、彼女の胎内は、ゆっくりとうねりを見せていた。細かいヒダヒダが波打つように愛撫をしてきて、まるでペロペロと舐められているみたいだった。

「じゅるっ……茜さん、熱くてトロトロで……なんて、気持ちいいんだ……っ!!」

「ああ、わ、わたしも……じゅっ、ちゅう……っはあ、変、へんなの……何か……」

茜もまた、確実に性感を目覚めさせられているようだった。遅しい傘に隅々まで擦られて、膣肉がうっとりとうねりながら蕩けるように優しさを増していく。そして胎内を埋められる充足感に、美しい女体が愛らしく悶えくねられるのだ。

「はあ、はあ、はあ、たあ、拓郎、く……わたし、気持ち……よくう……!」

開いた股を少年に絡めながら、乙女の腰が緩やかに振れる。瞳が悩ましく閉じられ、目の前の唇に舌を伸ばす。

「るちゅっ……んう、すれ、るう……擦れるの、気持ち、いいのお……!」

まるで彼を求めているような仕草。足袋に包まれた踵で少年の腰を軽押しして、濡れ股に導いているかのようだ。そして締めつけは一層激しくなり、傘の裏までめくりあげるようにしごいてくる。

「くうっっ! 茜さん、そんなに締めたら……僕、もう……っ!」

(だ、だめだ! このままじゃ、僕のほうが……!)

「くひいいいいつつ!? おっ、おにい……くああああああんつつ!!」

恭悦の悲鳴をあげる巫女二人。共に男手にこね回されて、腰をガクガクと震わせる。性器による摩擦ではなくとも、他者からの刺激は容赦なく性感を狂わせてしまうのだ。

「はあ、はあ、こっ、こんなにオマ○コグチヨグチヨにして、何ていやらしい巫女さんなんだ、みんなっつ!!」

三者一様に、男を貪る巫女姉妹。神々しくも淫靡な肢体たちに、少年の理性は確実に崩壊していく。

(き、気持ちいい……! 好きだ、大好きだ!! もっと味わいたい!!)

指に絡みつく肉のネットリ感が、肉棒を締めつけるフワフワ感が、堪らなく心地よい。まるで両手までペニスになってしまった気分だ。長女の淫靡を撫であげ、三女の狭腔をこすり、次女の名腔に楽しまれる、性器そのものな錯覚。

「ああっ、はあっ! たっ、タックン、まだ硬くなって……す、素敵……もっともっと、動かしてあげるねっつ……!!」

次女の肢体がさらに大きくグラインドしていく。グチヨネチヨと淫らな音色を奏でながら、股丘をこすりつけるように揺らす。すると長い勃起がグニグニと角度を変えられて、柔腔肉を満遍なく揉みこんでいく。

当然、ペニスも隅々まで舐め回されて、ますます勃起率が高められてしまう。溢れる蜜も底知らずで、ローションも顔負けなほどに、愛棒をネトネトにしてしまった。

じゅぽつ!! じゅぽつ!! ピチンっ!! ピチンっ!! じよぷつぬぷつ、ぬちゆぬちゆ!!

「あ、あああ……つつく! あ、茜ええ……は、激しい……中つつ!!」

「あはああ、んんつつ!! き、気持ちいい? わたしのナカ、気持ちいい!? ああつ!  
コレ、タックンだけのオマ○コだよ、タックンだけがシテいいんだよ!」

心のタガも外れてきたのか、より卑猥な言葉も口にするようになった茜。だが、そこかしこには少年への愛情も交えてあり、雄の興奮が臨界まで燃えあがらされてしまった。

「あつ、茜ええつつ!! 僕堪らないよおつつ!!」

「ああつ!? きやううつつつ!!」

これまで受けに回っていた拓郎が、急に茜を押し倒したのだ。

腰を引き少女を転ばせて仰向けに。そして倒れた乙女の両足を掴むと、頭に向けてガバツとV字に股を開かせる。

「いっ、いやあああんんつつ!! こ、こんな格好……つつ!!」

いわゆるまんぐり返しという体勢だった。袴が翻り、完全に恥部を見せつける形になってしまふ。そのあまりの卑猥さに、さすがに恋人少女も羞恥に震える。

「はっ、恥ずかしいつつ!! こんな、こんなああ……!!」

「はあつ、はあつ、や、やつぱり最後は、僕がシタいんだ。僕が貫いてあげたいんだ!!」  
（そうさ! このままじゃ、僕だけイっちゃう……茜もちゃんとイカせてあげたいつつ!!）

自分の限界を悟ったため、力強く責められる形にしたかったのだ。

そして、トポトポと蜜沸く愛腔口に、再びオタクな肉勃起が突き立てられる！  
ぢゅぶううっ！！ ムじゅるるるううっ！！

「あああああああああつっつっつ！！ ふっつ深いいいいいっつっつ！！」

ほとんど真上から串刺しにされて、喉も裂けよと声を張る茜。勢いよく胎を満たされ、圧倒的な乙女快楽に涙を振りまいて狂喜してしまう。

そして挿入少年も、膝を屈めて腰を振りたて、恋人の美股を熱く乱打していく。

ピチン！！ ピチン！！ ぢゅぶつぢゅぶつ！！ ぐむつぬちゅぶるるっつ！！

「あっ！ あっ！ あっ！ ふかつ、深いっ！ とっ、届くうううっつっつ！！」

「はあ！ はあ！ はあ！ うん！ 届いてるよ、奥っ、コツコツしてるうっつ！！」

力をこめてドンドン叩きこむと、みっちりした腔肉とは違う、やや硬い肉感触が先端を刺激してくる。硬いといっても痛くはなく、むしろ硬さがより密着度を感じさせて心地よい。

「あううっつ！！ あああつっ！！ すご……！ ナカ、当たってるウ……オチンチン、奥に、チユツて……！ きつ、キスされてえええ……とっ、溶けちゃうウウウ！！」

初めての最深部に茜はひたすら狂い悶えた。長い肉根は乙女の子宮にまで到達してディープキスをしているのだ。その甘刺激に、羞恥も忘れたように恭悦の涙を振りまいている。  
「んあああああつっ！！ たつ、拓郎クうんっ！！ アタシも、アタシももっとかき回してええええっつ！！」



「ふあああああんっつ!! さ、桜も、桜もおおっつ!!!」

拓郎は碧や桜にも手は抜いていない。茜を倒した後、すぐさま指姦に入っている。返された次女は喜んで膝を抱えてくれたので、両手がフリーになったからだ。

ぐちゅっ!! にちゅうっ!! みちゅみちゅむちゅねちゅううっ!!

「あっあっあっあっ!!! そっソコ!! 弱い……んわあああああっつ!!!」

くの字に曲がった指に、感じるポイントを探られてしまう長女。指の腹でクチヨクチヨとかき回されて、左右から少年に抱きついて悶えよがる。

「ふにゃあああああ……!!! おお、おに……ちや……オマ○コ……いっちやつ!!」

やはり指に犯されて、粘膜を蕩かされる三女。薄い胸乳を兄少年になすりつけて、プルプルと悶え震える。

碧も桜も、激しい指の動きに翻弄されている。

一気に高められているのか、少年の肩に捕まってガクガクと痙攣している。捕まらないと膝立ちすら維持できないらしい。

「いっ、イキそうなんだね? じゃあいつて! 二人まとめていっっちゃえ巫女さんっつ!!!」

自身も限界の近いオタク少年は、ついにラストスパートに入った。指を掘るように進めて、温かい濡れ髪をネプネプとかき出していく。そして肉勃起は、あるだけの力でグラインドを重ねていく。ズドン、ズドン!! と杭を打つように、雄々しく逞しく。

「あうあああああっつ!!! ひいあああああっ!! あひいっつ!! らめえっ! らめえ!! 奥、

オクつつ、当たる、あたるううううつつ!!!」

激しい抽送はペニスの出入りも激しくした。大きなエラに肉襷を引つかかれ、猛烈な媚熱に腰跳ねる次女。抜けそうなところで再びジュぽん!! と叩きこまれると、尖った肉先に子宮が甘強く揺らされてしまう。その淫撃に悶える素肌は、みるみるうちに朱色に染まっっていく。

全身汗まみれで清楚なまとめ髪を振り乱す。瞳は涙に濡れて、小さな口からは唾液までが伝い漏れている。どう見ても、性的快感で絶頂を迎える乙女の姿だった。

「はあっ! はあっ! はあっ!! はあっ!! 茜、当たってるよ! 一番奥まで僕が届いてるよ!!」  
少年とて限界は間近だった。恋人の中には今までにない締めつけと柔らかさで、クイックイックと搾りつつも、根元ではぐちゅりと握り締めている。さらに最奥では心地よい唇に鈴口を舐められて、尿道をユルユルと溶かしていくのだ。もはや溶解は目前だ。

「あううつ! あはああつつ!! もつ、もおらめえええ……!! タックんのオチンチ……きもひよすぎて……いい、イクウ……! イッチやうウウウ……つつ!!!」

快感に呂律が回らなくなる茜。熱い恋人性器に味われ、乙女の純情と性感は爆発寸前。「もお、もおおつつ!! らめえええええ! ちようらい……タックんのせえし、欲しいの  
おとおつつ!!!」

燃え盛るような衝動を口にして、茜は全身を弾ませてよがった。避妊も何もない、ただ彼のすべてを求めるように、豊かな乳房と臀部を悶え跳ねさせるばかり。



瞬間が訪れた。

「あつつぐあああああつつつ!! イつつ——イク!!! もう出る!! 出る! 出るっ!!!」  
フウツ——と失われる、ペニスの表面感覚。甘い痺れが臨界を超えて、中心部に意識が集中。そして……熱い恋慕が最後の一撃を叩きこむ!

「おおあああああつつつ!!! イクうううつつつ!!! 出るうううつつつ!!!」

ずじゅぽおおんつつつ!!!! ドプウウツツ!!! ビュぶぶるるるうううつつつ!!! ぐび  
ゆっぐびゅっどびゅっびゅるるっ!! きゆるるるるううううううつつつ!!!

「ひいいあああああああああつつうううんんつつつ!!!? いいいい——っ  
っくうううううううううううつつつ!!!」

膣の最深部、産宮の内に大量の熱液が走る! それは津波のような勢いで胎内へと殺到し、美しい巫女を少年色に染め上げていく。

「あああああ……!! あ・つ・いいいいタックんの……熱いのが、ああああ!!」

待ち望んだ液悦に晒されて、憑き物が落ちたような恍惚を浮かべる茜。注ぎこまれる情熱に浸るように、うっとり微笑んで頤を反らす。

そして拓郎もまた、恋人と深く根元まで繋がったまま、圧倒的な解放感に晒されていた。  
（おおあああ……!! や、やっぱり……茜は、最高だ……遠慮なくぶちまけられる……）

本当はそうでもないかもしれないが、やはり恋人相手にはわけが違う。思う様媚態を堪能し、最後まで繋がっていられる快感は、何物にも代え難い喜びだった。



# キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- 雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- 二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ジャンル別**で作品も選べて超便利!
- 二次元編集部**の愉快的Blog**も更新中!
- 期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!



<http://www.cran-berry.com/>

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!



<http://www.mille-feuille.jp/>

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!



<http://www.2d-dream.jp/>

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**